

四  
七

古  
書  
翁

卷

四

中  
外  
厚





今右奇談新草卷之四

幻術乃教戒



申の玉玄摩平おま始めて押と築より  
 徳玉乃通和便をゆては変は機と築に  
 交易して富と致と者多く買家叔子  
 美街と常小腰りくは玉はくは信花  
 けつくはははるる一はは神戸  
 若わくくくくくくくくくくくく  
 利徳ふんやうくくくくくくくく  
 顔は金銀と役けはすは縁有の身とるう

居つてくくくくくくくくくくく  
 么れ傳は著くくくくくくくく  
 もりかろうくくくくくくくく  
 初盤とゆけておくくくくくく  
 便かたはくくくくくくくく  
 つかれに於子あり女房も不便は  
 くるにいもくくくくくくくく  
 於子と指ひ言さば石女も子と  
 云はくくくくくくくくくく  
 りもわくくくくくくくくくく







すもくはうにたうすひをりる座敷ひこふ  
六十ふ余る以風の公体そあけたるがはきいそく  
日づしそ英泉乃客くあもさば女房も帰く熱  
傷のあまうにや續て病臥地同ぐく身まうる  
又まふ防別何系友の家中に後會專在あそ  
歸るれき細柳の連人あう別殿乃師範と改し居  
るふ度いそく四年あくまりく情弱そはあふ  
おほき諸奢とそくしあひあふ改りけさ強く海  
えとやとあふはいろけく用さそめものそく  
と移ふ暇とそくあふあふ必とそくは改ふし細柳あ

御るきあ附もき座敷大器乃人かたあそと  
和歌乃公やと力く一生諸事とちりたるふそまに  
あ花とふああうそは父の公立とふ大は返り信濃の  
生貨そとふへあそあて人は痛き内公強怒  
熱く父あおひ細柳事柳と近色れ若者ふ指直  
し又かれ父ああるいそくそて幼童に素儀とあ(四  
書小學の儀釈るんぐて世のたうそたりあに  
神戸屋店と希も事猶とあひんあうてわくあ病が  
あそあうてあ易くかうひるが父母れ喪中にてあ  
歸るれお代はあそあそくそてあるるあ專あ見







しるふもさうて榮耀ふく守らうと堪忍一店を  
いふごま年を温和の生受るも六家業とかすらど  
目能楽友なとみいくをく信たぬひ新町の  
世女は別保多く金程とほひ捨るとんまうかうも  
そんてんは仕事とて己が心れく捌くる店業  
金程の時兄弟に付とまゝ一重店之帝年二十  
は及びて家とて一姉と身代と二つにて家  
すんごうこれまゝまゝ店之帝くや二十にぬくが  
家代配分のとて玄妙あらにち荒快面とあら  
店之帝好興ふつり金程みいとすふさうりさう







左衛門の用心とて敷の沼糸と居間の床下ふ  
坪の底とるも大すいらね程とらう内売とらう程  
も知ふ事を知る者かけきべ定て是もこそ方  
計つひ拵も一は毒を被る費用と致は  
りやとも分るるべし金るやとては舞れ  
ども唯今お後とてき金るはづとてとて  
うけ切あわりし涙はち花おととて人  
知とてくせんおとふなりおと涙一ととる  
とて店とておと女よとと奪つては花とて  
ゆるまばかりととととととととととと



うとてふも中花あつてくく母が望むつひは  
遠ひうと強くつひあつて終ふ身行ふ所  
公事と成るうい時天下我國の事申はく政事  
もわううと有来れ終は終るも花あつて  
確と遠るふ世に帝が叔父とて主君と業確  
ふをひ終るくわねてとほふを主一の世に花  
中ふらうひあつてとさんふ何れに帝の  
くのそ尾とて終の成とやうく配分し別家  
ううも花の別る生業いうと整のふ損失  
主難世よりび終る婦のふ合カと終る花

一向清村とて父を云の世一人は分たうとかな  
うもす終も合カ終るあつてと情あつて人  
えうの世に花あつてと終る一終る花  
もあつて終るあつて家の無なる他人の友人は押  
終るれ朋友の世に花あつてと終るあつて終る  
月見花あつてと終るあつてと終るあつてと終る  
あつてと終るあつてと終るあつてと終るあつてと終る  
のあつてと終るあつてと終るあつてと終るあつてと終る  
あつてと終るあつてと終るあつてと終るあつてと終る  
と終るあつてと終るあつてと終るあつてと終るあつてと終る



の心もさびしくすけりおのづから契く事なきも  
もたぐく底なきがほろろ寝床の床を傳く候に  
はまふ孤燈の心もさびしくすけりおのづから契く事なきも  
むねなきも身もさびしくすけりおのづから契く事なきも  
事を余もめさる候りも病ふ事と云けり  
づゝ病もさびしくすけりおのづから契く事なきも  
師の方より少も合ふと云我難儀と余もさる候り  
本懐と云長生も余の毒にさびしくすけりおのづから契く事なきも  
有るが候人さる候り又病が候りさる候り  
びとさる候りさる候りさる候りさる候り

こゝと病もさびしくすけりおのづから契く事なきも  
わさる候りさる候りさる候りさる候り  
を床に常々抱く候りさる候り  
さる候りさる候りさる候りさる候り  
わさる候りさる候りさる候りさる候り  
長生が平生の病もさる候り  
薬はさる候りさる候りさる候り  
床切の衣抱と云候りさる候り  
さる候りさる候りさる候りさる候り  
さる候りさる候りさる候りさる候り



授とする人ありても市價にまかりお人よりいふ  
に柳邪見玉振のまゝ人なり何とあつて  
しきりく云ふ人をねり或夜西蕭々として  
風するまじくいし物凄なりおとを来ま婦人  
むい物凄くわうふ俄に家鳴震動あびどしく  
いづく方行くまじく二つあつて二人あふて  
くとき痛くも月人ふあつて中よりたちまち死  
に來まぬが幽霊のまじく杖ふすうとあつて  
若くあつてあつて柳はま婦人なり我に編み  
ゆとして実るれをふふ所と云うけ死すといふ

そとへいれゆと云う夢見る苦すん代わうと一  
合方でもうぬと我事苦とつて能く一  
押ひり此方なりけおまへ我にけりおられ  
とと指ひるおみけく不便とけき言ひて  
の大悪と云ふまう人高今もあひあつてまぬの  
まふ二人がまふに拒まんとしておれを  
して又作續くまじくおれとて中とあつて  
まじくとまふと云ふまふ二人の體はあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて



よゝるに獄の城門をくぐりて極楽の光る天と地  
一敷百人は侍候する有りて人々を御心の御  
と侍人の途の川をわたりて帰るる人にもある  
是る人また地獄へ行く人もあるおかしき事  
しとひてより衣冠なりてあるとそれとてま  
父もあつたり座を敷て居て女侍も侍ふ  
とや何の罷よりして夜ふあつてとて親座を敷居  
の地乃とてかゝる文にて行ひんとするとある  
とて侍候する人の御心も侍候する候ふまじりて  
被一人めくると今途途よりあるりては長く

来るふ一面の回とてなありていふ  
地獄の苦とて侍候する人々を御心の御  
中より今より地獄なりとておぼるる人々も  
安んずる人々も座を敷て居る人々も  
金持の財とて金持は金持は金持は金持は  
り我々もふらびひとて時又地獄へ行く  
まゐふ人々を御心の御心も侍候する  
印の御心も侍候する人々も御心の御心  
とて一廉座なりておぼるる人々も御心の御心







へたふももとして奇妙と感し止るを耐え  
ふふと病と送る人といふ謝徳と云ふ心あり  
は謝徳いづこそかく稱し必けるをばふ人  
へはるもあまといふくゆる唐書史婦と  
智海とあると九幻の奇妙ふあふはふ  
軍途へいづこそ思ひく西事此後と  
お恥とあふもあふてきもの事なり

遇害狂人

尾形名古屋は植何来と云えり  
わるそれゆふれ難堂とはあ居る

いふはあふふふ古屋と云ふ業と知はふ  
うらぬんでら并座なる有識は書は徳又生  
意用なる神道儒典教字のくぐと何い  
と世に稀なる辨舌くむりて知れた事なり  
うとるふき抄ふ云ふ我邦の故実よあて  
凡そあはにあはれいふかぐ世ふ人もか  
人云も和の字は能辨と云ふ和漢の博識  
はくふ人の子性と一度面談をば能  
まわふ不接しいうる者と席伏するふ妙  
ゆてはあふ人も多くりふけ益名を云ふ



とておれ著述の事と梓行すとも金銭難  
よりて己が力をも惜み見せられぬ事  
ありてはおれが力も惜み見せられぬ事  
おれのおれとあつて文とあらうりた書の題目と作  
て梓行すまは杜撰の説多く次第小細かく人々  
おれ小細かくゆけむ名を屋を位建末妻子こそまた  
いふ家のおれこそす貴押ひ終の書と作ておれ小細  
有威とてふふ武家なふとふけりおれ西武  
田の末家老の子息同族十希といふ人よりふ  
おれと力なり例の終末は世有威の事を始り終  
し

梓行せしとて梓行するふ後十希といふ人よりふ  
おれと人々知す上りおれ小細かくおれと人々知す  
おれと人々知す上りおれ小細かくおれと人々知す  
有威とてふふ武家なふとふけりおれ西武  
田の末家老の子息同族十希といふ人よりふ  
おれと力なり例の終末は世有威の事を始り終  
し



[illegible]







うかた人とまゝいふ。一級よりあつとせしめ  
て一級中沢より自穀よりす。また多極をいふ  
ど又案あるをれ。而居とかり。職原あるをれ。海原に  
あるふいづいづとも能く上り。れ。二つある人の  
まゝ人のみく又門人多くなら。て。皆健ふ。等々  
よある。耐難。馬色の。隠者あり。六つあり。れ。毛人の  
て。乃。あり。また。み。職。を。ま。い。心。と。つ。く。佛。あり。古。書  
か。い。と。ま。く。不。持。した。る。折。子。中。く。博。識。と。い。ふ  
て。また。極。が。あ。る。を。か。く。う。さ。う。き。る。を。と。決。令。ふ  
一。つ。と。て。知。ふ。と。い。ふ。う。く。教。訓。後。活。して。か。ん。と







立りてゝそのる禪のうちは僕が年頃うゝ一  
 古記さんど入念なるがけらゝかゞとて別て保  
 わるゑんまゝ漢の流と改めんとつてゐる  
 今やゆゑとゑ久しく待病とて席がや  
 延居して珍しくた書やあるとて入念の  
 禪とてゐていゝ店といひけりやどろ程の  
 ぬきぬきの度又夏時といふと夥しく  
 とあるは外影とてゐるゑんまゝとてゐる  
 と書るゑんまゝといふ書入るやんとつて  
 其の度又とて奥の字とて撰てゐるや

らんこらびあるものなり 終るまでこれに自害を  
せしめて一層十希す所の血は流うがごとく 熟睡  
する處より人よほして泣き死なるとふたたび 救  
まれぬおそれありとてつゝもあきらめて死んで中よ  
り一暇あるものありいかに苦しい最期の者いとも  
かく憂ひあるか 後十段く 母仇人ありしを 寝て  
さゆ 對面せしとき 咄息ある殺人の志と云はれる事  
高く 山谷よりぞくぞくする時 後十段が 海へとい  
ちてゆく 植民地からゆくや 死ぬるふたたびハ  
るや 大和ふぶきよりくるけしき すべて 植民地として



所<sup>ところ</sup>ありむ<sup>む</sup>ふ<sup>ふ</sup>を<sup>を</sup>む<sup>む</sup>人<sup>ひと</sup>あ<sup>あ</sup>と<sup>と</sup>汲<sup>ひく</sup>事<sup>こと</sup>う<sup>う</sup>何<sup>なん</sup>も<sup>も</sup>なく  
 明<sup>あきら</sup>く<sup>く</sup>も<sup>も</sup>ふ<sup>ふ</sup>ぞ<sup>ぞ</sup>中<sup>なかつ</sup>に<sup>に</sup>神<sup>かみ</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>「<sup>こ</sup>う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>す<sup>す</sup>ふ<sup>ふ</sup>後<sup>あと</sup>を<sup>を</sup>  
 う<sup>う</sup>う<sup>う</sup>も<sup>も</sup>い<sup>い</sup>で<sup>で</sup>ふ<sup>ふ</sup>夏<sup>なつ</sup>十<sup>じゅう</sup>日<sup>にち</sup>が<sup>が</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>迄<sup>まで</sup>く<sup>く</sup>追<sup>お</sup>ひ<sup>ひ</sup>き<sup>き</sup>は<sup>は</sup>強<sup>つよ</sup>  
 く<sup>く</sup>う<sup>う</sup>う<sup>う</sup>も<sup>も</sup>え<sup>え</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>う<sup>う</sup>拘<sup>こ</sup>へ<sup>へ</sup>に<sup>に</sup>む<sup>む</sup>人<sup>ひと</sup>々<sup>々</sup>あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>か  
 ぞ<sup>ぞ</sup>と<sup>と</sup>久<sup>く</sup>ふ<sup>ふ</sup>た<sup>た</sup>ら<sup>ら</sup>も<sup>も</sup>う<sup>う</sup>敷<sup>せ</sup>十<sup>じゅう</sup>丈<sup>ぢょう</sup>の<sup>の</sup>大<sup>おほ</sup>き<sup>き</sup>の<sup>の</sup>形<sup>かたち</sup>と<sup>と</sup>愛<sup>あい</sup>  
 ま<sup>ま</sup>う<sup>う</sup>輝<sup>くわい</sup>く<sup>く</sup>あ<sup>あ</sup>眼<sup>がん</sup>と<sup>と</sup>う<sup>う</sup>の<sup>の</sup>白<sup>しろ</sup>眼<sup>がん</sup>紅<sup>こう</sup>の<sup>の</sup>大<sup>おほ</sup>き<sup>き</sup>の<sup>の</sup>足<sup>あし</sup>は<sup>は</sup>  
 わ<sup>わ</sup>う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>は<sup>は</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>所<sup>ところ</sup>に<sup>に</sup>遠<sup>とほ</sup>く<sup>く</sup>う<sup>う</sup>ま<sup>ま</sup>て<sup>て</sup>た<sup>た</sup>ま<sup>ま</sup>  
 所<sup>ところ</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>も<sup>も</sup>く<sup>く</sup>水<sup>みづ</sup>は<sup>は</sup>も<sup>も</sup>た<sup>た</sup>た<sup>た</sup>た<sup>た</sup>後<sup>あと</sup>も<sup>も</sup>う<sup>う</sup>夏<sup>なつ</sup>十<sup>じゅう</sup>日<sup>にち</sup>  
 が<sup>が</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>迄<sup>まで</sup>く<sup>く</sup>う<sup>う</sup>の<sup>の</sup>付<sup>つ</sup>け<sup>け</sup>は<sup>は</sup>定<sup>さだ</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>い<sup>い</sup>何<sup>なん</sup>も<sup>も</sup>に<sup>に</sup>  
 う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>進<sup>すす</sup>み<sup>み</sup>た<sup>た</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>果<sup>は</sup>た<sup>た</sup>と<sup>と</sup>う<sup>う</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>に<sup>に</sup>

中りと藤の目つとをさばいさし申す、  
 あやしの海も又ふけとけとをうゝん落れぬ、  
 かつうろつとをうゝん落れぬ、  
 故に下師よす、  
 今とる紙知る人よりとる

今古奇蹟



